

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19760431
 研究課題名 (和文) 大規模施設のユニット化・サテライト化に対応した調理システムとその厨房計画
 研究課題名 (英文) Desirable Meal Cooking System responding to Small Care System of the Facilities for the Aged
 研究代表者
 三浦 研 (MIURA KEN)
 大阪市立大学・大学院生活科学研究科・准教授
 研究者番号：70311743

研究成果の概要：行動観察調査に基づきユニット調理の効果を調査した結果、調理職員の見守りの可能な時間が多く発生することが把握され、調理のみならず入居者の“見守り”効果がユニット調理にあることを見出した。また、施設種別を超えた 159 件のアンケート結果から、利用者の「買い物」への参加については、「委託せず」よりも「厨房運営委託」「給食委託」になると「買い物」への参加頻度が少なくなる。調理職員が利用者の食事場面や食事介護の様子を確認する頻度についても、「ほとんど見に来ない」「月 1 回程度」は、「厨房運営委託」「給食委託」が多くを占め、介護現場と連携できていない実態など、調理方法が高齢者施設における生活やケアの質にも影響する事実を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	1300,000	390,000	1690,000
年度			
年度			
年度			
総計	2200,000	390,000	2590,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学・都市計画・建築計画

キーワード：高齢者施設、ユニットケア、調理システム、厨房計画、行動観察調査

1. 研究開始当初の背景

2002年に個室・ユニット型特別養護老人ホームが制度化され、ユニットで調理を行う施設が現れ始めたが、圧倒的多数の特養では、セントラルキッチンで大量調理された食事を一斉に食するという「食」の提供方式が続けられていた。このため、空間構成にユニットケアを取り入れたものの、認知症グループ

ホームで成果を挙げた家庭的な雰囲気が作れず、高齢者の生活が受動化が改善していない、という指摘が申請者を中心とした一部の研究者からなされた。しかしながら、グループホームにちかいユニット調理の効果については、なんら実証研究がなく、その効果は確認されていなかった。また、高齢者施設において、どのような調理方法が採用されてい

るのか、実態についても、何ら情報がなかった。

2. 研究の目的

上記のような背景において、本研究では、①先駆的に「ユニット調理」の効果の検証として、「個室・ユニット型」特養（定員 60 名、6 ユニット）1 事例を調査対象とし、2 ユニットで、両リビングのビデオ撮影による定点観察と、1 日 14 時間の調理職員の行動観察調査を行い、ユニット調理が高齢者の生活に及ぼす効果について明らかにすること、

次いで、②高齢者施設における調理の実体を明らかにしたうえで、調理方法の選択が、生活やケアの質にも影響する事実をアンケート調査により施設種別を超えて明らかにすることを目的とする。

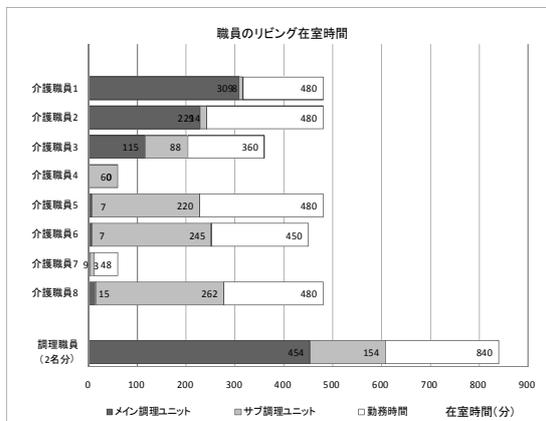
3. 研究の方法

研究目的①については、「個室・ユニット型」特養（定員 60 名、6 ユニット）1 事例を調査対象とし、2 ユニットで、両リビングのビデオ撮影による定点観察と、1 日 14 時間の調理職員の行動観察調査を行った。また、研究目的②については、大阪市・大阪府の介護職員を対象として、施設種別を越えた横断的アンケート調査を実施した。

4. 研究成果

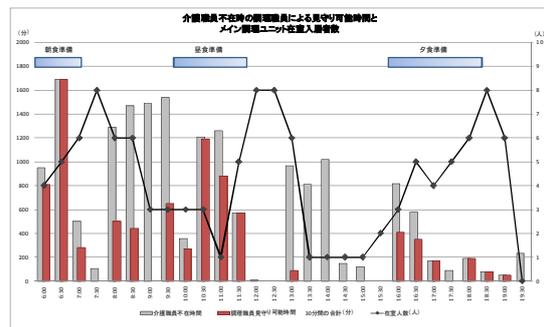
目的①については、1) 介護職員がリビングに滞在する時間は、一人当たり 3 時間 19 分（8 時間勤務に換算）に対し、調理職員のリビングへの滞在は、2 名合計で 10 時間 8 分リビングであった。このことから、介護職員よりも調理員のリビング滞在時間が多いことが把握された。

図 1 職員のリビング滞在時間



2) 次に、時間帯ごとの見守り可能時間を、メイン調理ユニットとサブ調理ユニットで比較し、介護職員のリビング不在時間帯の中で、調理職員による入居者への見守りが可能な時間が何分発生したのか、その時リビングに在室していた入居者数を併せて分析した結果、調理しないユニットでは、調理員の滞在がわずかであったのに対して、メイン調理ユニットでは、調理が行われるため、調理職員の見守りの可能な時間が多く発生することが把握された。

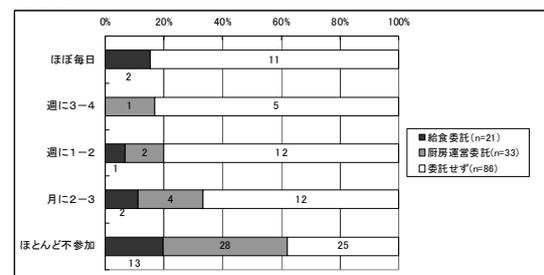
図 2 職員不在時間における調理職員による見守りが可能な時間と利用者人数



以上 2 点から、“見守り”の役割がユニット調理にあることが見出された。なお、調査対象とした特養では、職員配置から 2 ユニットのうちの片方でユニット調理を実施し、もう一方のユニットでは、簡単な盛り付け等に留まっていた。効果を双方のユニットにもたすためには、交互のユニットで調理するなどの工夫が必要である点が課題として見出された。

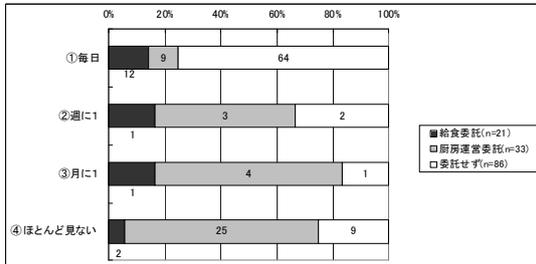
また、目的②については、159 箇所の施設種別から回答を得た。その結果、3) 利用者の「買い物」への参加については、「委託せず」よりも「厨房運営委託」「給食委託」になると「買い物」への参加頻度が少なくなること。

図 3 調理方法と利用者の「買い物」への参加状況



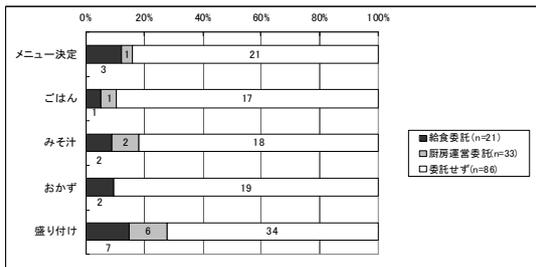
4) 調理職員が利用者の食事場面や食事介護の様子を確認する頻度についても、「ほとんど見に来ない」「月1回程度」は、「厨房運営委託」「給食委託」が多くを占め、介護現場と連携できていない実態が把握される。

図4 調理方法と利用者の調理への参加状況



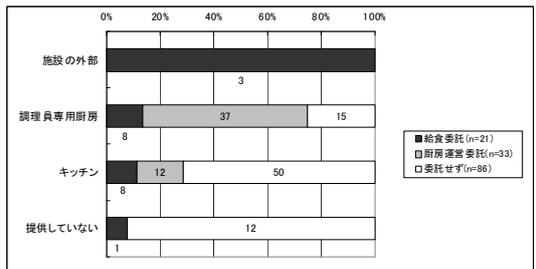
5) 「メニューの決定」、「ごはん」「みそ汁」「おかず」「盛り付け」といった行為についても、「利用者が参加する」と回答した多くが「委託せず」であった。

図5 調理方法の違いと利用者の調理片付けへの参加状況



6) 「きざみ食」を用意する場所についても、利用者のその日の様子を確認しながらきざみ具合を調整できる現場キッチンでの実施は、「委託せず」が多く、「厨房運営委託」「給食委託」では、顔をみずに実施している割合が多いことが確認された。7) 職員が利用者と同じ食卓を囲むと答えた事業所は、「委託せず」が「厨房運営委託」「給食委託」を上回るなど、生活やケアの質にも影響することが把握された。

図6 調理方法と「きざみ」の実施場所



5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ①赤澤芳子・三浦研：特別養護老人ホームにおけるユニット調理の効果と課題ーリビングルームの観察と調理職員の行動観察調査を通してー日本建築学会計画系論文集 No.638、2009年、pp638-645、査読有
- ②赤澤芳子・三浦研：特別養護老人ホームにおけるユニット調理の効果と課題ー行動観察調査とアンケート調査による食提供の実態把握を通してー、日本建築学会大会学術講演集 E-1、2008年、pp339-340、査読なし
- ③赤澤芳子・三浦研：特別養護老人ホームにおけるユニット調理の効果と課題(その2) 行動観察調査による食提供の実態把握を通して、日本建築学会大会学術講演集 E-1、2008年、pp341-342、査読なし
- ④赤澤芳子・三浦研：特別養護老人ホームにおけるユニット調理の効果と課題ー行動観察調査とアンケート調査による食提供の実態把握を通してー、日本建築学会近畿支部研究報告集、2008年、pp129-132、査読なし

[学会発表] (計4件)

- ①三浦研、赤澤芳子：特別養護老人ホームにおけるユニット調理の効果と課題(その1) アンケート調査による食提供の実態把握を通して (日本建築学会大会学術講演) 2008年9月20日広島大学
- ②赤澤芳子・三浦研：特別養護老人ホームにおけるユニット調理の効果と課題(その2) 行動観察調査による食提供の実態把握を通して (日本建築学会大会学術講演) 2008年9月20日広島大学
- ③赤澤芳子・三浦研：特別養護老人ホームにおけるユニット調理の効果と課題ー行動観察調査とアンケート調査による食提供の実態把握を通してー、日本建築学会近畿支部、2008年6月22日、大阪
- ④三浦研：基調講演「住環境から考えるユニットケアでの暮らし」特養・老健・医療施設ユニットケア研究会主催『ユニットケア全国フォーラム』2008年3月16日 神戸学院大学有瀬キャンパス

[図書] (計1件)

- ①三浦研：住環境から考えるユニットケアでの暮らし、『実践者がつくるユニットケア7』(CLC) pp30-39、2008、査読なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三浦 研 (MIURA KEN)

大阪市立大学・大学院生活科学研究科・准
教授

研究者番号：70311743

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし